

南極OB会 会報

No. 31

発行 南極 OB 会
編集 会長 国分 征
広報委員会

今号の主な内容

- 第 57 次越冬隊・第 58 次夏隊報告（越冬を終えて、第 58 次夏期行動を振り返って）
- 南極観測 60 周年記念 公開講演会・展示会・祝賀会、開催
- 支部だより 南極観測 60 周年講演会・展示会報告 九州支部、青森支部
- 話題 “宗谷” 新たな船出、南極 OB 会アマチュア無線クラブ会員募集、初代しらせ（SHIRASE）における 2017 年のイベントなどについて
 - 南極関連情報 ○追悼 佐野雅史さんをしのぶ
- 会員の広場（叙勲等、訃報、総会・ミッドウィンター祭、写真募集、アーカイブ）
 - 広報委員会からのお知らせ（通信費納入のお願い）
 - 編集の終わりに

越冬を終えて

第 57 次南極地域観測隊 越冬隊長 樋口和生



58 次隊との越冬交代式を終えて(2017 年 2 月 1 日)

2017 年 3 月 23 日、第 57 次越冬隊 30 人は 1 年 4 ヶ月に渡るミッションを終え、第 58 次夏隊とともに羽田空港に無事に到着しました。空港に出迎えに来た家族と笑顔で再会し、職場の人たちと誇らしげに話している隊員の姿

を見て、長かった越冬生活の終わりを実感しました。

越冬期間中、様々な出来事がありましたが、ここではトピックスを中心に、概要を報告させていただきます。

最大のトピックスとしては、海水の流出があげられます。3月下旬からリュツォ・ホルム湾の海水が流出を始め、4月に入ると東オングル島の東側に開放水面が見られるようになりました。その後湾奥の白瀬氷河末端付近の海水にも亀裂が走り、結果的には湾全域の海水が流れ出しました。昭和基地周辺で海水流出が見られたのは47次隊依頼10年ぶり、リュツォ・ホルム湾全域で海水が流出したのは44次隊以来13年振りのことでした。

昭和基地周辺では、とつつき岬方面の海水が一部流れずに残ったものの、海水上の行動は危険と判断して、比較的安定していた東オングル島近辺と西オングル島までの海水上以外での行動を極夜明けまで見合わせることにしました。

海水上での行動の制限は、野外観測や大陸氷床上での設営作業などに遅れが出るなどの影響をもたらしましたが、極夜明けに集中的に作業を行なったため、一部のミッションを除きほぼ予定通りに進めることができました。

ブリザードの多さも今回の越冬のトピックスに上げられます。ブリザードは合計32回(A級3回、B級13回、C級16回)襲来し、外出制限令は65回(禁止令18回、注意令47回)発令しました。ブリザード時間を合計すると34.85時間となり、この10年間で最多となりました。ブリザード後は建物周辺を中心に除雪を行ないましたが、相次ぐブリザード

によってまさに雪との戦いとなりました。

観測面でのトピックスとしては、モニタリング観測を行なってきた大気中の二酸化炭素濃度が5月14日に初めて400ppmを超えたことが上げられます。年々増加してきた大気中のCO₂が南極でも大台を突破したことが確認されました。

また、南極昭和基地大型大気レーダー(PANSYレーダー)55群フルスペックによる連続観測を56次隊から引き継いだ後、9月まで実施し、その後58次隊に越冬を引き継ぐ1月末まで継続する事ができました。

昭和基地からの情報発信にも力を入れました。衛星回線を利用したテレビ会議システムを使い、国内の小中学校などと結んだ「南極教室」や極地研の主催するイベント、国内外で開催された各種企画などに合計39回携わりました。

隊員は各自がそれぞれのミッションを抱えて忙しくしていましたが、人手の足りない時はお互いに協力しあい、単調になりがちな生活面でも創意工夫をし、トラブルが発生した時は知恵を出し合って解決するなど、楽しみながらも緊張感を持って越冬生活を送ることができました。

最後になりましたが、越冬期間中様々な形で国内からご支援いただいたOB会の皆様に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

第58次夏期行動を振り返って

第58次日本南極地域観測隊長 本吉洋一



上空からの昭和基地(2016年12月)

第58次隊は、夏隊35名、越冬隊33名、同行者25名の総勢93名という大所帯でした。このうち、「しらせ」に乗船した隊員・同行者は80名、それ以外の13名は東京海洋大学の海鷹丸に乗船しました。「しらせ」組は、女性隊員・同行者10名に加え、オーストラリア、中国、モンゴル、インドネシア、タイ、コロンビアからの外国人6人も含む多彩な顔ぶれとなりました。「しらせ」は、在豪日本人の方々に見送られて2016年12月2日にフリーマン

トルを出航し、一路南極を目指しました。南半球の暴風圏でもそれほど船が揺れることもなく、往路の海洋観測や海底圧力計の設置も予定どおり実施できました。海氷域に入ってから順調に航行し、12月21日には弁天島沖に到着、23日には昭和基地への第1便を飛ばすことができました。

今シーズンは、南極に出発する前から衛星や第57次越冬隊からの情報で、昭和基地沖の海氷状況がこれまでとは幾分異なり、大分開水面が広がっていることが分かっていました。そのため、昭和基地への接岸はまず問題なからうという見通しもありましたが、この予測は見事に的中し、12月28日に「しらせ」は昭和基地に接岸。往路のラミング回数は114回、復路は0回という、新「しらせ」が就航してからは最も少ない回数でした。接岸後ただちに貨油輸送と大型物資の氷上輸送を開始し、大晦日には持ち込み氷上輸送が完了しました。ほとんどの燃料と大型物資を年内に昭和基地に運び入れることができたので、観測隊一同、すっきりした気持ちで新年を迎えることができました。正月2日からは輸送作業を再開し、持ち帰りの氷上輸送、本格空輸により、1月16日にはすべての輸送を終了しました。

さて、第58次計画は、第IX期6カ年計画の立ち上がりとして、夏期間には盛り沢山のミッションが予定されていました。また、昭和基地開設60周年を昭和基地で迎える、という幸運に恵まれました。いくつかのトピックスを紹介します。まず観測系では、重点研究観測のメインテーマ「南極から迫る地球システム変動」の一環として、昭和基地に設置された南極大型大気レーダーPANSYを用いての国際共同キャンペーン観測、そしてリュツォ・ホルム湾海氷域での海洋観測が大きな目玉でした。とくに後者については、リュツォ・ホルム湾内奥まで開水面が拡大したこともあって、白瀬氷河出口付近までの海洋観測が実施できました。さらに長期にわたる野外観測として、S17での気水圏、ラングホブデ袋浦でのペンギン、スカルブスネスきざはし浜での陸上生物、そして地圏の地質調査と、いずれも天候に恵まれてほぼ予定通りの調査が実施できました。その他の野外観測も、「しらせ」搭載のCHヘリコプターと観測隊の小型ヘリコプターを駆使して実施できました。新しい取り組みとして、AFoPS（アジア極地

科学フォーラム）と連携したインドネシア、モンゴル、タイの若手研究者を招聘しての地質調査、観測項目としては初となる社会科学系の公開利用研究などもありました。また、今回で8回目となる派遣教員による南極授業も、合計4回実施しました。60周年記念イベントでは、昭和基地からテレビ会議システムで参加させていただきました。

昭和基地では、基本観測棟1階部分の建設と污水处理棟の解体に加え、基地設備の更新等、数多くの作業が待ち構えていましたが、第57次越冬隊の皆さんが除雪を精力的に行ってくくださったおかげで、第58次隊が昭和入りしてから直ちに作業を開始することができました。夏の間は天候にも恵まれ、基地作業は順調に進みました。とくに、基本観測棟の1階部分が完成したことと、污水处理棟の解体が完了したことは、今後の昭和基地の維持・管理にとっては朗報とっております。

こうして昭和基地周辺での観測・設営活動を終えた第58次夏隊は、第57次越冬隊とともに2017年2月15日に昭和を離れ、「しらせ」は北上を開始しました。その後は、海底圧力計の揚収・設置、アムンゼン湾での野外観測、ケープダンレー沖での海洋観測、復路の海洋観測を終えて、3月20日にシドニーに到着、23日に帰国しました。特段の事故やトラブルもなく、全員元気に帰国できましたこと、隊長として大変うれしく思っている次第です。この間、南極OB会の皆様からは有形無形のご支援・ご鞭撻をいただきました。この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。



しらせの往路復路の動き 国立極地研究所ウェブサイトより

南極観測 60 周年記念 公開講演会・展示会・祝賀会、開催

2017 年 1 月 22 日（日）、東京都千代田区の一橋講堂において、標記の講演会・展示会・祝賀会が開催された。講演に先駆けて、午前 11 時から講堂に隣接する中会議室において展示会が開かれた。この展示会は南極 60 周年を記念する写真パネル、南極点旅行写真集、第 1～3 次隊の写真集、第 1 次隊の宣誓書を含むアーカイブズ資料、内陸観測を中心とした資料集等が展示された。当日、会場では隊員が作成した歴史的な DVD の放映があり見学者は熱心に見入っていた。この展示会は公開講演会中も開催し、また、祝賀会の会場としても使われたので、十分に閲覧することができた。



展示場の様子

公開講演会は 13 時半より約 3 時間にわたって講堂で開催された。講演会の参加者は 252 名であった。一般参加者が 150 名を超え、関心の深さが伺われた。司会者は南極 O B 会の事務局長（（一財）気象業務センター）の松原廣司氏が担った。

冒頭に国分征南極 O B 会会長（東京大学・名古屋大学名誉教授）が 60 周年記念について挨拶があった。講演会に入って、最初に再開 50

周年、南極観測 60 周年記念事業を推し進めてきた南極 O B 会渡辺興亜事業委員長（国立極地研究所名誉教授）によって、再開 50 周年、南極観測 60 周年を記念したこれまでの関連講演会の紹介、とくに北海道から九州までの南極 O B 会の 15 地方支部で開催された記念講演会の紹介、また、「南極大陸大紀行」（現在、発行済）などの書物の編集・出版、記念品作成等の紹介があった。



展示場には、第 1 次隊員の宣誓書も

講演会は第 1～3 部に分かれており、第一部は「日本南極観測を築き上げた人々」と題して、南極 O B 会の神田啓史（国立極地研究所名誉教授）が南極観測 60 周年の足跡を振り返り、60 年の歴史の流れを解説した。南極観測の準備・訓練に始まって、現在の第 58 次隊までの観測隊員、乗組員の活躍ぶりを画像で紹介するものであった。講演の後、場内に参加されていた初期の観測隊員、乗組員のインタビューがあり、第 1～3 次隊に参加された中村純二氏からはオーロラ観測やタロ・ジロの思い出を懐かしく語ってくれた。第 1～3 次隊宗谷乗組員として参加した高尾一三氏は西堀越冬隊隊長と一緒に旗を翻した時の思い出、ま



インタビューの様子、写真左より中村純二氏、高尾一三氏、上竹嘉和氏

た、磯貝重信氏は60年前の宗谷の前に立った時の心境を語ってくれた。最後に、遠方から新幹線で駆けつけてくれた第3～5次に参加した乗組員の上竹嘉和氏は4次隊で遭難した福島伸隊員のことを熱く語ってくれた。

インタビューが終了した後は、南極観測60周年を記念して自宅訪問してインタビューを行っていた朝日新聞記者（第45、51次隊同行者）の中山由美さんから、第1次隊の北村泰一氏、作間敏夫氏、楠宏氏、中村純二氏、村内必典氏、平山善吉氏、大瀬正美氏の元気な声と映像を紹介してくれた。この南極観測60周年を迎えるにあたって、これらのインタビューは南極観測を築き上げた人々の全員集合が実現したようにも思えた。

招待講演が第2部、第3部で行われた。第2部は「日本南極観測と国際交流」と題して、最初に、ハービー・マーチャント氏（オーストラリア国立大学客員教授）は日本－オーストラリア共同観測について講演された。オーストラリアと日本の南極観測についての関わりは、100年ほど前の白瀬矗探検隊の頃に遡る。それは白瀬隊長がシドニー大学のエッジ



ハービー・マーチャント氏と講演風景

ワース・デイビット教授と接触した時に始まった。それ以来、日豪共同観測はもとより、第50次隊で日本が観測船を用意できなかった時に、オーロラ・オーストラリスが輸送を担ったこと、「しらせ」が2回にわたってビセットされたオーロラ・オーストラリスを救援したことなどがあり、相互に有益な協力体制が維持されたことをお話された。

次にジン・ヨングム氏（韓国極地研究所主任研究員）は日本・韓国共同観測について講演された。韓国のキング・セジョン基地と日本の昭和基地とで相互に共同観測が実施されたこと、また砕氷船アラオンによって主に北極海の観測を日本と共同観測を実施してきた



ジン・ヨングム氏と講演風景

ことが紹介された。

第3部は「南極観測のこれから」と題して、川村賢二氏（国立極地研究所准教授）は南極氷床コアから見る地球環境の変動について講演された。ドームふじ基地での過去2回の深層掘削によって過去72万年の環境を復元することに成功し、多くの観測成果が上がっている。今後の世界の話は「最古の氷床コア」を取得することである。その所在場所がドームふじ基地の周辺にあるとも考えられている。日本の観測隊は100万年を超える世界最古の氷を取得して地球の環境変動を解明することが、これからの日本観測隊の大いなる挑戦であることを理論的に解説された。



川村賢二氏と講演風景

なお、公開講演会、展示会は南極OB会、国立極地研究所、（公財）日本極地研究振興会の共催、朝日新聞社、共同通信社、毎日新聞社、読売新聞社、中日新聞社、産業経済新聞社、テレビ朝日の後援で開催された。

記念講演会が終了した後、午後5時半より隣接する中会議室において記念祝賀会が開催された。祝賀会の参加者は89名であった。祝賀会の会場が午前中から開催している展示会

場でもあったので展示を見ながらの和やかな
雰囲気では進行した。南極O B会の山岸久
雄氏（国立極地研究所名誉教授）が司会をし
た。国立極地研究所の白石和行所長より挨拶
があり、続いて、日本極地研究振興会の吉田
栄夫理事長より挨拶、乾杯の音頭があって、
歓談に入った。その後の祝辞の最初に、記念
講演をしていただいたオーストラリアのハー
ビー・マーチャント氏からオーストラリア南
極局の所長ニック・ゲールズ氏より南極O B
会国分征会長に宛てた南極観測 60 周年記念

のメッセージが紹介された（別項）。その後、
南極O B会支部長の挨拶、現状報告などがあ
った。第1次隊の越冬隊員として活躍したい
すゞ自動車の故大塚正雄氏の御子息が思い出
をお話された。会も大いに盛り上がっていた
が、残念ながら時間が迫っており、最後に、
竹内貞夫氏（10次隊）の祝辞、中締めで記念
祝賀会を解散した。

（神田啓史）

「オーストラリア南極局ディレクターより南極O B会国分会長へのお祝いのメッセージ」

国分 征博士
南極O B会会長
親愛なる国分博士

日本南極地域観測隊（JARE）の創立 60 周年をお祝い申し上げます。オーストラリア南極プログラム
に 35 年以上携わっていたハービー・マーチャント博士が日本南極観測 60 周年を祝う会に招待されたこ
とに感謝いたします。日本は国際地球観測年に参加するために 1957 年 1 月、オングル島に昭和基地を
設立しました。昭和基地は日本の南極プログラムの拠点として大きく成長し、過去 60 年間、日本は南
極科学へ大きな貢献をしました。南極のオゾンホールダイナミクス、南極の隕石、氷床コア解析、オー
ーラ物理学、湖沼の珍しい生態系、プレートテクトニクス、海洋研究等に大きな成果があり、国際的
な評価を得ています。南極大陸で観測するほとんどの国は、独自の設営と輸送が実施され、基本的に国
家事業として行われています。しかし、皆さんが知っているように、南極は本国から遠く離れた地域で、
厳しい気象や不利な水条件のもとで設営コストも高くなるので、南極での観測や生活は容易ではありません。
そこで、今日では海洋科学、氷床掘削、地質学、超高層大気物理学等は国際協同プログラムで実
施することが多くなっています。

日本とオーストラリアは国際協同観測では多くの強固な関係を築いてきました。私たちは科学者を交
換し相互に有益となりました。1985 年（第 27 次隊）には、初代「しらせ」がアムンゼン湾でビセット
されたネラダンを救出し、1998 年（第 40 次隊）には再びオーロラ・オーストラリスを救出しました。
一方、日本が砕氷船のない第 50 次隊ではオーロラ・オーストラリスによって昭和基地への物資輸送が
行われました。さらに、昨シーズンの 2016 年初めには、オーロラ・オーストラリスがモーソン基地の
ブリザードで座礁した時にも、新「しらせ」はオーストラリア観測隊員をモーソンからケーシーに輸送
しました。

両国のこれらの関係は南極観測 60 年間についてでしたが、日本とオーストラリアの南極の関係はず
っと古いのです。すなわち、100 年以上前のことですが、1910 年 11 月とその翌年にも、日本南極探検
を率いてきた白瀬隼隊長と隊員は南極の途中で、オーストラリアのシドニーに滞在しました。そこで彼
らはエルンスト・シャックルトン探検隊の一人として南極を経験したシドニー大学の地質学者エッジワ
ース・デイビッド教授と接触し、協力を得たのです。シドニーから南極に向かう第2回目の遠征の時には
白瀬中尉はデイビッド教授に感謝の手紙を書きました。その手紙の中で白瀬隊長と隊員はオースト
ラリア人によって「科学の分野で兄弟として扱われた」と書いてありました。日本は南極のパイオニア
としての白瀬を記念して、南極砕氷船に“しらせ”（Shirase）と命名したことは理にかなったことで
した。さらに、「科学の分野での兄弟」という言葉は、日本とオーストラリアの南極プログラムの間に何
十年も存在してきた協力のレベルを反映していると思います。このようなコラボレーションは今後も
続くと思っています。

再び、日本南極観測 60 周年を心からお祝い申し上げます。

オーストラリア南極局ディレクター
ニック・ゲールズ
2017 年 1 月 16 日

（神田啓史訳）

連載 支部便り

支部便り③ (九州支部)

南極観測60周年記念 in 熊本の報告

－テーマ：南極の自然と南極観測－

南極OB会九州支部では、平成29年3月18日(土)12時～16時、熊本地震からの復興を願い、熊本城のふもと熊本市の国際交流会館において、南極観測60周年の記念行事として、「南極の自然と南極観測」をテーマとして、記念講演会と展示会を行いました。極地研究所の他、NHK熊本放送局、熊本放送他民放3社、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会の後援をいただいた他、たくさんの関係者からのご協力をいただき開催することができました。

【南極観測記念講演会】13時～16時



村上雅健OB会九州支部長の挨拶

記念講演会では、3名の南極経験者により、これまでの南極観測の歴史や自然、昭和基地の状況など、一般の方にも分かりやすく説明されました。予定していた席も足らなくなるほどの満員となる中、講演後はたくさんの質問もあり、多くの方々に南極観測に対する興味を持っていただくことができました。

講演は、村上雅健OB会九州支部長の挨拶のあと、39次、44次隊に参加された宮田敬博氏による講演で始まりました。ヘルメットと作業服の恰好で登場され、「南極へ行ってみよう！」と題して、現地で撮影されたビデオの映像により、南極の自然や生活が分かりやすく紹介されました。



宮田敬博氏による「南極へ行ってみよう！」



鮫島正和氏による「初代南極観測船宗谷物語」



西牟田一三氏による「昭和基地、再開」

次に、5次、6次隊で参加された鮫島正和氏

による「初代南極観測船宗谷物語」と題した講演では、観測船宗谷の厳しい航海や初期の南極観測の苦難を紹介されるとともに、時代の移り変わりで南極が身近になったことを話されて、これから南極観測隊を目指す子供たちに希望を与えることができました。

最後に、8次、14次隊に参加された西牟田一三氏による講演では、「昭和基地、再開」と題して貴重な体験をもとにした、南極観測60周年にふさわしい内容で南極観測を知る人も知らない人も興味を持つことができる講演でした。

講演後は、参加者からの質問が絶えず、熊本市民、県民に少しでも南極観測の意義や隊員の生活等をご理解いただけたかと思います。

【展示コーナー】12時～16時

講演会に先立ち開催された展示コーナーには、極地研究所から提供された「南極の氷」と「防寒服等」の他、OBの皆様からペンギ



防寒服を選ぶ子供たち

ンのはく製をはじめ、岩石や生物類、図書類や飾り切れないほどの写真、パネル等を持ち寄ってもらい、展示にご協力いただきました。

中でも「南極の氷」コーナーと「防寒服」のコーナーでは、絶えず人だかりが出来ており、大きなD靴に小さな足を入れてみる小学



展示コーナーの熱心な見学者たち

生や、水を入れた氷のはじける音に耳を澄ます初老の婦人もおられて、いろいろな質問も受けました。



氷の音を聞く子供たち

今回のイベントは、事前に近隣の小学校へのチラシ配布や新聞社等へのPRの効果もあり、入場者は160名を超え、大盛況のうち終了することができました。

ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

(35w 岩崎恭二)

支部便り㊥ (青森支部)

南極観測60周年記念

—南極教室—「すごい南極 みつけた! ～南極観測60年の贈り物～」報告

南極観測60周年記念事業の一環として南極教室を開催しました。支部員、OB会支部担当運営委員、八戸在住のしらせ元乗員、極地研広報室の協力のもと、盛会となりましたのでご報告いたします。

開催日は昭和基地発足の1月29日に合わせました。講演は小学生も参加できるように、できるだけ簡単な内容とし、広報はチラシ2,000部を市内の3校の小学校や塾、八戸市水産科学館マリエント、八戸市児童科学館等

に配布を依頼しました。八戸市記者クラブへの投げ込み投稿を行った結果、八戸市内のコミュニティFM、地方紙上でも事前の開催案内をしていただきました。



講演中の小森智秀氏

子どもの集中力を考慮し、飽きさせないよう3名の講演者が6校時に分けて授業を行う形式としました。

1、2校時担当の山岸氏は、日本の南極観測の歴史、60年の成果とご専門のオーロラについて主に大人の興味を満たす内容について写真を交えながら講演いただきました。昭和基地発足時を知る一般の参加者にも楽しんでもらえた様子でした。

3、4校時担当の小森氏は写真、動画を中心に、南極の寒さを示す実験やブリザード時の映像、転ぶペンギンなど、参加者を大いに楽しませていただきました。



南極氷の展示、「音が聞こえるかな？」

4校時目終了後は休憩と展示鑑賞の時間とし、極地研広報からお預かりした防寒具、南極氷のほか、オゾンゾンデ、南極産のコケ、写真パネルなどを見てもらいました。

5、6校時担当の鮎川は、南極のコケに関する話と青森出身者の南極での活躍、特に57次越冬中であつた調理隊員渡貫淳子氏らによ

る「南極八戸せんべい汁プロジェクト」について紹介しました。講演後の質問時間には観測隊員になる方法や青森でオーロラを見る方法などについて、山岸氏が回答しました。



会場の様子、向かって左手奥にオゾンゾンデ、壁には南極の写真パネルの展示

開催日が極地研での記念式典などと重なったため、式典や昭和基地からの映像と前後して今回の講演会も一連のテレビニュースとして放送されたほか、新聞紙面でも昭和基地の記事の隣にこの講演会の様子が掲載されました。青森県民にも南極観測を身近に感じてもらえた一日になったような気がします。当日、ご協力いただいた方々には大変感謝しております。青森県支部の人数は少ないですが、今後は会員同士の交流も深めていきたいと思っております。転勤等により、青森に転居してこられた方はぜひ、支部幹事（鮎川：ayukawa@hi-tech.ac.jp）へお知らせください。

（概要）

・講演会：南極観測 60 周年記念—南極教室—「すごい南極 みいつけた！ ～南極観測 60 年の贈り物～」

・開催場所：八戸市児童科学館 視聴覚室

・主催：南極OB会青森支部

・後援：八戸市教育委員会、八戸工業大学

・協力：国立極地研究所、八戸市児童科学館

・実施日時：平成 29 年 1 月 29 日（日）

13：30～15：30

・講演者、講演タイトル

○山岸久雄（極地研名誉教授）（19、26、36、38、45、53 次）、「南極観測 60 年の歴史」、「オーロラのふしぎ」

○小森智秀（青森気象台）（50 次（開催時））、「昭和基地ってどんなところ？」、「南極の気象と気象隊員のしごと」

○鮎川恵理（八戸工業大学）（42 次）「南極で
生きる植物」、「青森から南極へ行った人びと」
・参加者人数：約 60 名（幼児 2 名、小学生

17 名、中高生 4 名含む）

（42 次 鮎川恵理）

話 題

“宗谷” 新たな船出

2017 年 4 月 1
日、昨年 9 月から
休止していた“宗
谷”の一般公開が
再開しました。

休止中は船内外
の修理とペンキの
塗り直しが行われ、船齢 79 歳とは思えないほど美しく生まれ変わりました。

満船飾を掲揚し

たこの日の天候は雨。“宗谷”の緊張が空に伝わるのでしょうか？

初めて南極へ向けて出港した日もそうですが、大きな節目の日には不思議と雨が多いようです・・・

公開再開後は絶え間なく見学者が訪れ、船内には半年ぶりに活気が戻りました。中には子供の姿も多く見られ、将来この中から、船乗りや南極観測隊員が誕生するかもしれないと想像すると夢が広がります。

また、船内でのボランティア活動といえば、宗谷 OB と南極 OB 会の有志による解説員が主でしたが、メンバーも増え、ペンキ塗りなどの軽微なメンテナンスの他、清掃や真鍮磨きなど、活躍できる場が広がり、例年よりもまめな手入れも可能となりました。

東京オリンピックが開催される 2020 年には 新客船ふ頭ターミナルが完成し、この辺り



2017 年 1 月初旬 整備中



2017 年 4 月 1 日 一般公開再開
（満船飾で見学者を迎える“宗谷”）

の景色も大きく変わります。

装いも新たに、沢山の夢や希望を乗せ、次の未来に向けて出港したばかりの“宗谷”に、お時間がありましたらぜひ、会いに来てください。



2017 年 5 月 子供たちの健やかな成長を願って「鯉のぼり」を掲揚

（会友 木村洋子）

南極OB会 アマチュア無線クラブ 会員募集

南極観測 60 周年記念事業のひとつとして、昭和基地では JARE58 越冬隊により従来の JARL/日本アマチュア無線連盟南極局（8J1RL）と平行して、60 周年アマチュア無線局（8J60JARE）の運用が始まっています。

8J60JARE の免許人は南極 OB 会アマチュ

ア無線クラブで、60 周年記念のために急遽立ち上げたもので、JARE58 出発直前の 11 月 1 日付で免許されました。

これを機会に同好の士を募り、アマチュア無線クラブの活動を活性化したいと思っております。当面は 9 月 2 日（土）～3 日（日）



昭和基地と交信する小学生

東京ビッグサイトで開催される「ハムフェア 2017」にブースを設け、南極観測隊の活動紹介や記念グッズの販売をするとともに南極 OB が集う場にしたいと考えております。

南極 OB から広く会員を募るとともに、イベントなどにご協力いただける方を募集致します。ご興味のある方は小林正幸 (wombat@ttv.ne.jp) までご連絡下さい。

よろしくお願い致します。

小林正幸 (25 次、46 次)

初代しらせ(SHIRASE)における 2017 年のイベントなどについて

一般財団法人 WNI 気象文化創造センター事務局長 三枝 茂 (37 次夏オブ)

船橋港に係留されている、三代目南極観測船「初代しらせ(現名称: SHIRASE)」では今年も年 5 回の頻度で一般公開を行います。また、SHIRASE を係留している岸壁横にあるビール工場見学とのコラボレーションツアーを週 3 回、日 3 回の頻度で開催します。

ここではその具体的な内容について説明します。

1. チャレンジング SHIRASE2017(写真 1)

SHIRASE のチャレンジ精神や五象(宙象・気象・地象・水象・海象)・五季(春・梅雨・夏・秋・冬)を五感(視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚)で感じ取るといったコンセプトのもと、定期的に一般開放し、地域の皆様による店舗の出店、科学の実験体験コーナーといった内容の体験型イベントを今年も年間 5 日の頻度で実施していく計画です。開催日程は以下のとおりです。



写真 1 チャレンジング SHIRASE での実験体験の様子

	テーマ	主なイベント
第 1 回 : 5 月 28 日(日)	[水・海象]	マリンフェスタ Funabashi2017 との共催。SHIRASE の前に試験艦「あすか」がやってきます。
第 2 回 : 7 月 17 日(月・祝)	[全象]	晴海埠頭に曳航し、海の日日本のイベントに参加
第 3 回 : 8 月 19-20 日(土日)	[宙象]	船橋港にてしらせ 5003 と並べて開催
第 4 回 : 10 月 29 日(日)	[地象]	単独開催予定
第 5 回 : 11 月 19 日(日)	[気象]	単独開催予定

* 開催日や開催内容については、事前に変更になることもあります。念のため次のホームページもご確認ください。(http://shirase.info)

2. ビール工場見学とのコラボレーションツアーの開催(写真 2)

SHIRASE を係留している岸壁の隣には、サッポロビール千葉工場があります。この工場では、ビールの製造工程の理解向上を目的として工場見学や商品の試飲が従来より行われていて、毎年多くの見学者が訪れています。SHIRASE の見学とビール工場の見学をセットにすることにより相乗効果が得られないかとの考えから、このツアーを週 2 日、1 日 2 回の頻度で開始しました。開始した結果、週末日曜日は 80%前後、平日は 50%前後の稼働率となり、好評を博しています。2017 年

6 月からは週 3 日(水木日に開催)、1 日 3 回(1100、1300、1500 スタートで所要時間 2 時間)の頻度で開催し、多くの見学者を受け入れる予定です。もしよろしければこの機会に SHIRASE とビール工場の見学をされてはいかがでしょうか。

＊開催内容や申込方法は、次のホームページで確認ください。

(https://kengaku.sapporobeer.jp/booking/booking.php?search_main_plan_id=2)



写真2 コラボレーションツアーの様子

3. 観測隊や乗員 OB による宿泊や協力について(写真 3)

・宿泊について

観測隊や乗員 OB の皆様にとっては、過去の姿に想いを馳せたいという気持ちが強いと思います。皆様にとっては SHIRASE を“想いを深める場”(隊員や乗員同士による懇親会の会場)として是非とも利用して頂ければと考えています。これまでに 9 隊次・3 つの南極観測に参加された企業の集まりが、懇親会場や宿泊場所として利用していただきました。今後も持続的に利用頂ければ幸いです。

・協力について

多くの観測隊 OB や乗員 OB の方々がイベントの運営スタッフ(船内ツアーのガイドや書籍・グッズの販売、各企業の隊員による南極の生活に関する話などの発表役)として協力してくださっています。もし、読者のみなさまの中で興味が有りましたら、チャレンジング SHIRASE 事務局(shirase-goiken.shirase.info)までご連絡頂けると幸いです。



写真3 各隊次の宿泊の様子

南極関連情報

第 57 次越冬隊および第 58 次夏隊の帰国

樋口和生第 57 次越冬隊長以下 30 名並びに本吉洋一第 58 次観測隊長兼夏隊長以下 35 名及び同行者約 70 名が、平成 29 年 3 月 23 日(木)に空路で羽田空港に帰国した。

第 57 次越冬隊および第 58 次夏隊の帰国報告会および歓迎会

平成 29 年 4 月 11 日(火)、国立極地研究所主催の帰国報告会および歓迎会が明治記念館で開催された。報告会は「曙の間」において各国大使、議員、しらせ艦長がご列席の中で実施された。国立極地研究所白石和行所長は観測隊が観測を終え、また乗組員が無事に



帰国報告会の模様

任務を終え、到着されたことは喜ばしい。今年は南極観測 60 周年の記念すべき年で、あ

りのままの報告をお願いしたいと挨拶があった。最初に、「しらせ」より一足早く3月23日に帰国した樋口和生副隊長兼越冬隊長の報告があった。観測12名、設営17名の越冬隊30名が無事に帰国した。越冬中の気温はやや高く推移し、32回のブリザードがあり、雪かきが大変であった。越冬開始後、5月に最大瞬間風速が47mに達し、CO₂濃度がはじめて400ppmを越え、基地前の海氷が開いたことがトピックスになったなどの報告があった。続いて、本吉洋一隊長兼夏隊長の報告があった。第58次観測隊は第IX期南極観測6カ年計画の初年度にあたり、重点観測項目「南極から迫る地球システム変動」を中心に観測が

始まった。この年は南極観測60周年目の節目になり、新たに社会科学系の公開利用研究が加わったことが報告された。

報告会の終了後、会場を「鳳凰の間」に移して歓迎会が開催された。白石所長の挨拶に続いて、来賓の挨拶があり、藤井理行（国立極地研究所名誉教授）氏の乾杯で歓談に入った。途中、岡田雅樹第58次越冬隊長から祝電があった。しばし歓談の後、越冬隊員集合の前で樋口隊長の挨拶、夏隊員集合の前で本吉隊長の挨拶があり、会は盛り上がった。

（神田啓史）



追悼

佐野雅史さんを偲ぶ



観測隊に初めて参加した第10次夏隊、昭和基地食堂で挨拶

佐野さんと初めて会ったのは、私が南極観測隊に初めて参加した19次隊の時だった。当時、板橋にあった極地研究所の1階には、観測隊の事務や設営を取り仕切る事業部があり、廊下を挟んだ隣が大きな倉庫になっていた。窓も冷房もないその倉庫の一面で、観測隊員は、汗だくになって準備に勤しんでいた。私のように秋田などの田舎から出て来て、東京に適当な宿舎が無い何人かは、同じ建物の奥まった部屋に2段ベッドを用意してもらい

寝泊まりしていた。勤務時間が終わっても、金も無く特に用事もない若者達（当時私は24歳）は、時間を持て余し、隊員室に残り、残業らしきことをしていた。そうすると、設営を担当する観測協力室の佐野さんから「ビール飲みに来ないか？」と声がかかった。そのうち、公園の捨て猫が餌を待つが如く、この声を毎晩待つようになった。やや細い眼に頭は丸刈り、太い二の腕の佐野さんを最初に見たときは、怖くて近づき難かったが、話してみるとこれが正反対、優しい声で南極のことをいろいろ教えてくれる人だった。

当時、設営を担当していたのは、室長の村越さん、竹内さん、佐野さんが中心だった。



セールロンダーネの山々に遊ぶ

観測隊員の担当に「設営一般」という部門があって、輸送業務、基地で使う日用品や隊員の防寒具などの調達、それに隊の庶務なども担当しなければならなかった。佐野さんは、この分野の指導者として、様々なノウハウを手とり足取り教えてくれた。今から思えば、これほど多分野に亘る業務をよくも一人でやり繰りできたなと感心する。確かに頭のいい人だったに違いない。

佐野さんは、その後、建築や小型航空機の運用にも携わった。最も目を輝かしていたのは、26、27 次隊で参加したあすか基地建設の頃だったと思う。26 次隊では、観測拠点の位置を決め、20m×5m の主屋棟を雪面に建てた。隊員は、佐野さんが考案した大型のカマボコ型テントで寝起きし、カタバ風の収まる昼頃から深夜にかけて作業を行った。

また、27 次隊では、越冬したピラタス、セスナ機をやまと山脈に駐機させ、氷床のアイスレーダー観測を支援した。航空支援が終わると、やまと山脈からベルジカ山脈を抜け、あすか基地に雪上車で移動し、再び航空機による空撮などを行った。私が 28 次夏隊の設営隊員としてあすか基地に雪上車で到着した時には、日焼けした頼もしい顔で迎えてくれた。我々は、佐野さんたちが建てた発電棟の

内部に、上下水配管などの設備工事を計画していた。到着するなり、私のところに寄ってきた佐野さんは、ニヤニヤしながら、「逆に建ててしまったよ。」と小声で言った。矩形の建物外観からは何のことか分らなかったが、内部に入るなり気づいた。風下側に計画したトイレが風上側になっているではないか？今更建て替えることもできないので、配管経路をやり繰りして何とか収めたが、ここで初越冬した鮎川隊の皆さんは、臭いが気にならなかったのか？もし臭ったなら、それはすべて佐野さんのせいなのです。

佐野さんの次の大きな仕事は、3 階建ての管理棟を建設することだった。32 次隊で基礎工事、33 次隊で躯体が完成し、34 次隊から使用できるようになった。その後、昭和基地整備計画の一環として、通路棟や倉庫棟などの建物を次々と計画したのは、全部佐野さんである。また、やや意外だが、太陽電池パネルを設置して基地電力源とすることも佐野さんの発想だった。さらに、16mm フィルムやビデオによる記録映像製作にも情熱を持って取り組んだ。とにかく設営のいろんな分野で大活躍され、それらの仕事をニコニコしながら楽しまれた佐野さんだった。

(石沢賢二)



おめでとうございます:叙勲、受賞

平成 29 年春の叙勲



真木太一 氏 (11 次越冬) 瑞宝中綬章
安田昌弘 氏 (19 次越冬) 瑞宝小綬章
沖政進一 氏 (16 次越冬) 瑞宝双光章

ご本人も含め、叙勲、受賞等慶事がありましたらお知らせください。

訃報 ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

(敬称略)

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
稲川 譲	25w,35w	気象	H29.1	62	齋藤捷一	37s	生物医学系	H28.4	75
佐野雅史	10s,13w,21s,24s, 26s,27w,31s,33s		H29.2	75	関野 保	9w	機械	H26.9	81
細谷昌之	07s,09w	機械	H29.3	88	鈴木喜一郎	19w	超高層	H27.8	71

2017 年度南極OB会総会・ミッドウィンター祭の開催について

日 時：2016 年 6 月 17 日（土）受付 14:00 より

場 所：レストラン「アラスカ」

東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 9 階

プログラム：

- (1) 第 23 回「南極の歴史」講話会： 14：30～15：30
演題 「南極観測 60 年、内陸トラバースの歴史」 講師 渡辺興亜
- (2) 南極 OB 会総会： 15：45～16：45
- (3) ミッドウィンター祭(南極倶楽部同時開催)： 17：00～19：00
※ミッドウィンター祭会場： レストラン「アラスカ」
※ミッドウィンター祭会費： 5,000 円

会員の皆さまの沢山の参加をお待ちしています。詳細は、同封リーフレットを確認ください。

< 今年もカレンダー写真募集します！ >

南極 OB 会オリジナルカレンダーは来年版で 4 年目になります。今回も写真を募集します。2018 年 1 月から 12 月のカレンダーに、皆様のおとておきの写真をぜひとも掲載させていただきます。

カレンダーは仕上がりが見開き A3 版で、写真は片側 A4 版にプリントされます。今年のオリジナル小型カレンダーと同様です。

写真はネガ、ポジ、プリント版のどれでも問題ありません。こちらでスキャンしてから原稿として使わせていただきます。原稿作成後はご返送いたします。



2017 年南極 CALENDAR、5 月の写真例

2018 年オリジナルカレンダーに写真をご提供いただける皆様、先ず下記南極 OB 会事務局へご一

報ください。こちらから写真のご送付先などをご連絡いたします。カレンダー用写真は随時受け付けますが、**2018 年カレンダー用写真については、8 月末まで**にお願いします。

なにとぞよろしくお願い申し上げます。

2018 年南極 OB 会オリジナルカレンダー制作グループ一同
連絡先メールアドレス：nankyoku-ob@mbp.nifty.com

南極 OB 会アーカイブ事業報告

南極 OB 会は元観測隊員等が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。資料の受け入れについては南極 OB 会事務局にお気軽にご相談ください。

2017 年 5 月 19 日付で、第 32 次隊海老名頼利氏、及び茨城支部吉高神充氏より、故柿沼清一氏のアーカイブ資料の情報が入りましたので、ここに記述します。実際の資料は板橋にある日本測量協会センターに保存中です。第 9 次隊南極観測新聞切り抜き(pdf)；少年ジャンプ、涙の極点 1969 年 4 号 JARE9(pdf)；拠点旅行中サイン入りの JARE 旗の写真；極点記念スタンプ入りミトン写真；柿沼清一南極の話講義ノート「南極昭和基地周辺の測量と地図製作」(pdf)；柿沼文庫リスト(54 冊、pdf)

*** 広報委員会からのお知らせ ***

○通信費納入のお願い

年度初めに当たり通信会費の納入のお願いと振込用紙を同封しました。また、会員の皆さんから通信費納入状況についての問い合わせが多いため、過去（5年間）と今年度の通信費納入状況を封筒の宛名ラベルに記入しています。確認の上、通信費の納入をお願いします今年度最初の会報を皆さまにお届けします。

右の図は、2014年度の会報送付用封筒に貼られた宛名ラベルの例です。

左側のラベルは、09、10が「○」になっているので、11、12、13年および、2014年の通信費が未納です。

右側のラベルは、09、10、11、12、13がすべて「○」なので、2014年度、当該年度の通信費をお支払いしていただくことになります。また、内容につき不明な点がありましたら、南極OB会事務局にお問い合わせください。



宛名ラベルの例

【編集の終りに】

➤ 新刊書籍の紹介 南極OB会編集委員会編

「南極観測 60年 南極大陸大紀行一みずほ高原の探検から観測・内陸基地建設・雪上車の開発一」が刊行されました。



南極観測 60周年を記念して、観測開始以来の南極大陸内陸域探査、観測の歴史をまとめた「南極大陸大紀行」が南極OB会編集委員会により刊行されました。

成山堂書店 2017年5月28日発行 264頁
2,592（2,400）円（本体価格）

➤ 講演会準備風景

講演会等の準備は、運営委員や会員・会友のボランティアの手作りによって行われます。ここでは、本文中に掲載されないような写真の一部を紹介します。



講演会看板を皆で準備する

南極OB会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

メール : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

郵便振込：加入者名 南極OB会 00110-1-428672

南極OB会ホームページ : <http://www.jare.org/>
